



仮想ゲンジツ



佐藤

「大丈夫？」

彼女は僕に言って僕ははっと我に返った。

「部活で疲れてるんだね。」

部活の帰り道。夕日が彼女を装飾していた。一日の中でこの瞬間が好きだ。部活終わり、クタクタの体がだいぶ彼女によって癒される。

「コンビニ寄っていかない？」

夕日がよく似合う彼女はそう言った。こんな何でもない会話ひとつひとつを大事にしよう。そう思った17時半だった。

家に着くと飼っている犬が迎えてくれた。この瞬間も好きだ。犬の名前はハチだ。犬として余りにも代表的な名前であるが、僕はこの犬を初めて見た瞬間ハチという名前が一番似合うと強く確信した。そんなハチが餌が欲しいのか僕が帰ってきて嬉しいのかよくわからない表情で甘えてきた。僕はハチに餌をやり二階の自室へと部活終わりの重たい足を運んだ。自室につくなりベッドに倒れ込んだ。毎日同じことを繰り返している。それでも間違いなく幸せな毎日であった。彼女のおかげである。

「ご飯あるから食べなさいよー！」

母の威勢の良い声が聞こえた。これもいつものことだ。母はこの時間帯パートで家にいない。一人っ子であるうえにこのように独りになることが多かった。だからこんな性格になったのだろうか。くだらない自問自答を続けつつ僕は自分の携帯電話を開いた。

「部活お疲れー。明日休みでしょ？映画でも見に行かない？」

彼女からそうメールが入っていた。

「わかった！じゃあ神城公園に11時集合な！」

そう返信をして僕はベッドに重たい体を降ろした。

ベッドが大きく歪んだ。そのまま僕は眠りについた。

「いつまで寝てるの！」

母の怒る声で目が覚めた。ふと枕元のデジタル時計に目をやると夜11時を指していた。母が持ってきてくれた夕飯が僕の目に入り、それを食べた。うまい。母の作る料理は絶品である。

「テストまで後何日だと思ってるの？早く勉強しなさい。」

食べるのが遅い僕を催促するように母はそう言った。テストまであと一ヶ月もあった。それなのにガミガミとうるさい母だったが自分のことを気にかけてくれていることは確かなので憎めなかった。机に向かい、英語の問題集を手を取った。英語は好きだった。反射的に答えを出せる文法問題が特に好きであり、何を勉強するか迷ったときにはこれに取り組んでいた。

しばらく勉強していた。よく集中出来たな、と自分で思い満足感に浸った。たった一時間弱しか勉強してないのに僕にはもうこれ以上勉強する士気は残っていなかった。一時間半ぶりにベッドに入り眠りについた。